
エレイス・クエスト

千道アタリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレイス・クエスト

【Nコード】

N8764R

【作者名】

千道アタリ

【あらすじ】

勇者シンと女戦士カナエは百戦錬磨の救世主である。そんな二人はなぜかまるで戦力にならないはずの貴族のぼんぼんを新しくパーティに迎えて魔王の城に挑む。果たして三人は魔王を倒すことが出来るのだろうか！

魔王の城は俺の家よりも狭かったぜ

長い旅を経て俺とカナエとシンはやつと魔王の城にたどり着いた。これから魔王と戦争をするには心許ない人数だが、俺たちはたった三人でも千の軍勢に匹敵する実力があるので必ず勝てるはずだ。

巨大な魔王の城を見上げながら、そんなことを考えているとカナエとシンがさっさと俺を置いて城の中に入って行った。

「おい、ちょっと待ってくれよ。ここはもつと慎重に行こうぜ」
慌てて追いかけて俺は女戦士のカナエに話しかけた。

「もしかして、あんた怖いのか？ はあゝっ、これだから、いいところのぼんぼんは頼りにならないんだよ。なあ、シン。こんな奴置いてさっさと行こうぜ！ 大体さあ、なんでお前が付いてくるんだよ。正直あしでまといなんだよ」

「そんな事言うなよ。俺だってこのままじゃいけないとは思っているんだ。だから一緒に魔王を倒そうぜ」

「こんなこと言ってるけど本当にいいのか？ シン」

シンはどうでも良さそうな顔で、

「……少しでも戦力になるならどうでもいい」

と言ってそのまま会話を打ち切った。

「まあ、あんたがいいというなら、私は別に構わないけど……」

「ほら、俺が言った通りだろ？ やっぱり、俺のほどの人材を腐らせておくのは世の中のためにもったいないからな！」

「うるさい。腐ってろ、お前は」

つれない女戦士を先頭に真ん中にシン、一番後ろに俺の順に縦に並んで城を搜索する。

「あまり、広くないな。これなら俺の家の方がだいぶん広いぞ」

「あっそ、なあ、シン。さっきからモンスターの気配がしないけど、もしかして逃げられたんじゃないのか？」

「……そんなはずはない。邪悪な気配がする」

シンの勇者の感がそう言っているのだろう。

確かに俺もわずかだが気配を感じる。

「旅に出てからはや一週間、割と簡単にここまでたどり着いたが。ここまでモンスターがいないのは不思議だな」

歩き続けること三十分やっとな魔王がいそうなエリアに到着した。

「おい、カナエ！ さっき通ったこの道をまっすぐ進んでいけば、三分で城の入り口からここまでたどり着けたじゃないか！」

「うるさい、黙れ。だいたい、それが分かっているがなぜお前はその事を言わない」

「そ、それはその、結局、どうせ俺が言ってもお前らは全然言うことを聞いてくれないし……」

「……そんな事はない。そういう事は早めに言ってくれ」

無口なシンがいつもの小さい声でそう言った。

「そうだ、そうだ。シンがそう言っているんだから、素直に自分の非を認めろ」

「どうしてそこまで責められる！ まあ、別に気にしないけどな」

魔界のプリンス

それから一応、武器や防具をチェックして小休止をすると魔王のいる部屋に突入した。

確かにそこには魔王らしき人が玉座に座っていた。

「あのー、もしかしてあなたが魔王ですか？ いやー、まさか女の子の姿をしているとは思ってもありませんでしたよー。じゃあ死んで下さい」

そう言って俺は一気に飛びかかり見えないバリアに弾き飛ばされて、派手に地面を転がった。

慌ててシンが駆け寄ってきて回復の呪文を俺にかける。

「ありがとう。だけどちょっと擦りむいただけだから、回復魔法は必要ない」

「……もしかしたら頭を打っているかもしれないから」

「頭なんか打ってないよ。だってわざと大げさに転んだんだし」

「……そうか。それは良かった」

シンは立ち上がり魔王を睨みつけて、背負っていた剣を抜き右手に持つと魔力を込めた。

全てを切り裂く魔剣バルキラは魔力を無限に吸収する対魔法使い戦、最強の魔剣である。

魔力を吸収すればするほど、その切れ味は増す。

俺を弾き飛ばしたバリアをその恐るべき破壊力で突破するつもりだよ。

カナエはその間ずっと俺とシンを守るように大きな盾で防御の姿勢をとっている。

敵はまだ一度も攻撃を仕掛けてこない、余裕の表れだろうか。

「……行くぞ。カナエはこのまま、ガードを頼む。お前はとりあえずどこかに隠れている」

シンはカナエと俺にそう指示をすると一瞬にして魔王との距離をつめて魔剣を振り下ろした。

「ふはははは、無駄だ。このバリアは絶対に破壊できない」

シンは何度も魔剣バルキラで魔王に斬りつけるが全てバリアにはねかえされる。

「じゃあこれならどうだ」

左手で聖なる光の玉を作り出し、至近距離でバリアに当てる。

勇者だけが使える究極の魔法ドグレアムだ。

さすがの魔王も後ろに飛びのいてそれをかわす。

瞬間、ドグレアムをもろにくらったバリアが粉々に砕け散った。

「なかなかやるな。さすが、勇者というわけか。だが無駄だ。こんな事もあるかと、とっておきのモンスターを温存していたのだ」

かなり大きいドラゴンが三体同時に現れた。

「まずはザコからさっさと始末して、そのあと勇者をじっくり料理してやる」

魔王はにやりと、してやったり顔をして、後ろに下がるとまたあの厄介なバリアを張った。

「まずいな。俺はともかくカナエはドラゴンみたいな最悪なモンスターに攻撃されたらひとたまりもないぞ」

そう言っている間に俺の前にドラゴン三体が一気に押し寄せた。

「俺が一番ザコそうに見えるのかよ。よし、いいだろう。本当はカナエがピンチになるまで待っているつもりだったが、仕方がない俺が一掃してやる」

俺は黒いマントの中から爆弾を取り出して、ドラゴンの口に放り投げて爆発させた。

あっという間に一体倒した。

次に両手を広げてどこからともなく愛剣を二本召還して両手に握ると滅茶苦茶に振り回してまた一体倒した。これで二体目だ。

残りの一体のドラゴンは圧倒的な実力の差に怯えてどうやら逃走を図ろうとしたらしく、後ろを向いていたので素早く回り込んで素手で腹を殴って気絶させてやった。

「つまらない。もっと強いモンスターは他にいないのか？」

俺が周りをうかがうと戦いは止んでいて、シンとカナエと魔王が無言で俺を見つめていた。

「あ、あんた、ただのお坊ちゃんじゃなかったのか？」

カナエが信じられないものを見たような顔で俺を見つめてくる。

「あれ？ 言ってなかったけ？ ほら裏ボスだよ。裏ボス、よくいるだろ魔界のプリンスとかそういうの」

「いねえよ。そんなの！ お前いい加減にしろよ」

「そんなこと言ったって、どのみちお前ら俺の元にたどりつく運命なんだから一緒だろそんなの、それに俺だってみんなと楽しく冒険したいんだよ」

「ちょっと、お前！ いくら裏ボスだからってラスボスである私の許可もなく勝手に城に入ってくるんじゃないよ。この裏切り者」

自分と同族だと知った魔王が急に馴れ馴れしく俺に話しかけてくる。

「裏切り者はお前だろうが。魔界の取り決めを無視して、勝手に人間界を征服して力を蓄えやがって、お前のようなやからがいるからいつまで経っても戦争はなくならないんだ」

「戦争？ はあ？ 人間のような下等な存在が我々魔族に支配されるのは当然の事だろうが！

戦争になるのは人間が無駄な抵抗をするからだ」

「俺から見たらお前も十分下等だが、一つだけ同じ魔族として忠告しておく、このまま戦えばお前は確実に勇者であるシンに負ける！ ここに来るまで俺はずっとモンスターとの戦闘に参加しないでシンとカナエの戦いぶりを分析していたから分かるがお前ごときでは、カナエを何とかぎりぎり瀕死にするので精一杯で最終的にシンに倒されるのが目に見えている。

もちろん俺も今回は仲間を倒されるのは嫌だから戦闘に参加する

から万が一、お前が勝つような事は絶対にない。大人しく負けを認めろ」

「ふふははは、私が負けるはずないだろう。なぜなら私は魔王だぞ！」

「俺は裏ボスだ」

「馬鹿め、やっと勇者が私を倒しにやって来たのだ。逃げる訳にはいかないだろう。それにまだ私は真の姿を見せてはいないのだぞ」

「じゃあこれからお前を攻撃して、完膚無きまでに叩きのめしてやる。シン、カナエ、突撃だ！」

「何でいきなりお前がリーダー気取りなんだよ！ リーダーは勇者のシンだろ」

「……よしやろう。今こそ魔王を倒すんだ」

「べ、別にシンがいいならいいけどな……」

暴走魔人

まず最初に俺がバリアを拳の一撃で消し飛ばし、カナエが容赦なくバトルアックスを魔王に叩き付ける。そして、最後にシンが勇者専用の究極魔法ドグレアムを魔王に放ち魔王の体は見事にバラバラになった。

「ふはははは、とうとう真の姿を見せる時が来たようだな」

魔王が痛がる様子もなくお決まりのセリフを言った途端、バラバラになった肉体は燃え上がり、一つの肉塊になって蠢き、巨大な天使の羽を持つ女神の様な姿になった。

「どうだ。恐ろしいだろう。私は負けない。世界は私の物だ」

魔王の眼が光った瞬間辺り一面が燃え上がり灼熱地獄となる。

俺はとっさにバリアを張って二人を灼熱から守ると、あたり一面に燃えさかる炎でわずかなダメージをくらいながらも瞬時に愛剣を両手に召喚して魔王を容赦なく切り刻む。

魔王はかなりのダメージを受けたようでよろめき片膝をつく。

「おのれ、おのれ、おのれ、まさかこの私がたった一度の攻撃でこれほどのダメージを負うとは……、こうなったら1人でも多く人間を道連れにしてやる。」

私はここで倒されても必ずやいつか復活するからなあ、ちょっとした最後の悪あがきだ」

魔王は魔力を大暴走させた。

大放出した魔力は激しくのたうちまわりムチの様にしなり、城をぶち壊し始めた。

しかも、両手で巨大な槍の様な形をした炎を作っている。

「冥土のみやげにその人間共を焼き殺してくれるわ。ふはははは」

このままでは俺はともかく二人は崩壊した建物の下敷きになって死んでしまうのは時間の問題だ。

その上あたりもすでに火の海だ。逃げようとバリアから出たらその瞬間に灼熱地獄にさらされ、あの強力そうな魔法をもろにくらうことになる。

今更、俺が魔王にトドメを刺したところでこの灼熱と城の崩壊はもう止まらない。

絶対絶命のピンチという奴だ。

「くられ、デストロイ・レッド・アロー」

そのデストロイ・レッド・アローと呼ばれた巨大な炎は真っ直ぐにカナエとシンがいるバリアに向かって投擲された。

二人がいるバリアがあのおく分らない巨大な炎の魔法に包まれてしまったら、さらに城から脱出するのが困難になると思った俺はとっさに身を盾にしてデストロイ・レッド・アローを防いだ。

ラスボスの必殺技だけあって思ったよりもダメージは大きく、あと一撃同じ技を食らったら俺も真の姿に戻ってしまうかもしれない。

「なるほど！ そんなにその人間が大事か。それならば、もう一度くらわせてやるよ。この姿で瀕死状態になった私は何度でもデスト

ロイ・レッド・アローを打つことができるからなあ」

なんて嫌な設定だ。

「ちょっと待ってくれ、俺はあと一発その技を食らったら真の姿に変身してしまうから少しダメージ量を調整してくれないか？ 仲間にそんな姿を見せたくないんだ」

「諦めろ、もうその人間共は助からない。トドメだ、デストロイ・レッド・アロー」

俺はまたもやその攻撃を身をなげうって防いだ。

全身が激しく燃え上がりやがて倒れて動けなくなる。体に力が入らない。

バリアの中で炎を消し飛ばす高等魔法を完成させたシンが灼熱を一気に鎮火して、俺の元に慌てて駆け寄ってくる。

俺の元にたどり着いたシンが回復魔法を必死にかけてくる。だがもう遅い変身はすでに始まっている。

体が勝手に空中に浮かび虹色に輝きだす。

俺が覚醒したせいで世界崩壊のカウントダウンが始まった。

もしも、このまま元の姿に戻れなかったら、この世界はあと一時間で跡形もなく消えてなくなるだろう。急がないといけない。

そう思い至った頃には、俺の体は完璧に変身を遂げていた。

「は、はは、それがお前の真の姿というわけか、やはりこうでなくては面白くない」

いにしえの時代から語り継がれるまがましいこの姿は、ただそこにただただ人々を震え上がらせる恐怖の象徴にして、世界の終焉を知らせる大邪神の第二子、暴走魔人エレイスの完全体である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8764r/>

エレイス・クエスト

2011年10月8日21時46分発行